

『千載和歌集』のアカツキの周辺

表象文学部・日本語日本文学科 小林賢章

一

稿者は、平安時代文学の朝方の時間表現について、今までに種々述べてきた。従来言われていたように、日付変更時点を丑の刻と寅の刻との間、午前三時であり、それ以降がアカツキと言われる時間であった。これだけだとアカツキの時間帯が従来より多少夜深く成る程度の変化であり、平安文学の解釈には余り大きな変化はない。しかし、アカツキという時間帯は当時の恋愛習慣では、女性の許に出かけた男性が帰宅する時間であったから、それだけでも、文学解釈のイメージは大きく変化するのであった。

本稿で取り扱う『千載和歌集』では、中世へ向けて、文学思潮が薄暮に向かったせい、その時間帯が作品世界によく現れるようになり、そこで和歌の意味解釈では稿者が述べてきた事実を認識して解釈するかどうかで、従来の作品理解にいささかの違いが生じることになるのである。

また、アカツキは午前三時を過ぎてでている月と述べた。『千載和歌集』で詞書にアカツキが使われる例は10例を数えるが、その詞書に対応する和歌では7例でアカツキ（ノツキ）が使用されるという対応が見られる。八代集平均は三割五分程度であるから、いかに『千載和歌集』ではアカツキ（ノツキ）の使用例が多いかがわかる。『千載和歌集』の時代になるとアカツキのイメージは文学作品制作で重要な要素になるが、それを表現するのに、直接時刻表現であるアカツキによらず、一屈折させたアカツキで表現するようになったことが分かる。将来においては『千載和歌集』ならその和歌集の文学思潮といった方向に研究が進められることが望まれるが、本稿ではその前段階として、『千載和歌集』で使用されているアカツキなどの語彙が稿者の意見により理解されると和歌そのものの理解がどのように変わるかを述べてみる。

本稿では、

片野達郎・松野陽一校注『千載和歌集』（新日本古典文学大系10 一九九三年 岩波書店）以下『新大系』と略称）
上条彰次校注『千載和歌集』（和泉古典叢書8 一九九四年 和泉書院刊）以下『和泉』と略称）

の二注釈書を頻用する。

二

アカツキの開始時間、それはヨハ（夜半）の終了時間であった²。その終了時間は動詞アクで表現された。結果、動詞アクは、日付が変わる、あるいは午前三時を越える意味を表した。アカツキを検討する始めにまず動詞アクを検討する。

夏月をよめる

祝部宿弥成仲

216 夏夜の月のひかりはさしながらいかにあけぬるあまのとならむ

夏の夜の月の光はまだ射しているのに、どのように明けた天の戸なのだろうか。（『新大系』）

夏の夜の月がまだ射しているのに、錠を閉ざしていた天の戸を無理にこじ開けるようにどうしてこんなにも早く夜が明けるのだろうか。（『和泉』）

さて、本稿の最初に検討する和歌でもあるので、少し詳しく両注釈を羅列し、その問題点をあげてみよう。上の句「夏夜の月のひかりはさしながらいかに」に対して、『新大系』は、「夏の夜の月の光はまだ射している」と口語訳し、『和泉』は、「夏の夜の月がまだ射しているのに」と口語訳している。つまり、両注とも、詠歌の時間は夜であると認めている。これに対し、下の句の「いかにあけぬるあまのとならむ」に対しては、『新大系』は、「どのように明けた天の戸なのだろうか」と口語訳し、『和泉』は、「どうしてこんなにも早く夜が明けるのだろうか」と口語

訳している。『和泉』は、「夜が明けるのだろうか」と「天の戸」が「あけぬる」の助動詞ナルを確述の用法で解釈しており、『新大系』は「どのように明けた天の戸なのだろうか」と助動詞ナルを完了に解釈していることがわかる。『新大系』の「明けた天の戸」も夜明けを意味しては解釈しているのだろうか、『新大系』と『和泉』両注では、助動詞ナルを完了と確述とに別解をとっていることになる。『新大系』は、「夜が明けてしまった」と解釈し、『和泉』は「夜が明けそうだ」と解釈しているのである。どちらが正しいか。この段階では、上句を夜と両注とも解釈しているのだから、「夜が明けそうだ」(『和泉』)が正しいと考えられる。だが、『和泉』の解釈の問題点は、「いかにあけぬるあまの」とのように助動詞ナルが連体修飾の形をとりながら、確述の用法を取り得るかという問題が存在する。この用法は、終止形をとるのが一般であるから、答えは否である。

とすると、両注ともに、解釈が成立しないことになる。そこで、問題を動詞アクに戻そう。上句からこの時点はまだ夜である。その時点で動詞アクが使われているのだから、この動詞はアクは「日付が変わる」意味ととらえればよいのではないかと私訳を示せば、「まだ夏の月は夜空に輝いているのに、どうして日付は変わったの」となる。このように解すと両注が持っていた矛盾が解決できる。というより、平安文学一般に動詞アクはまず、「日付が変わる」意味で使用されるという原則をここでも適用すればよいことになる。

二一一

動詞アクは『千載和歌集』の中で11例見出されるが、その中で前例のように、一般的な「夜が明ける」意味では解釈に矛盾が生じる歌数例を見ておく。

384 あけぬとも猶あき風はをとづれて野辺のけしきよおもがはりすな

源俊頼朝臣

の歌は「雲居寺の結縁経の後宴に歌合しけるに、九月尽の心をよみ侍ける」(384番詞書)の詞書の下に詠まれた歌である。384番歌は「九月尽」を詠んでいることになる。九月尽日は秋の終わりの日であることに問題はなからう。その場面で詠まれる「あけぬとも」である。両注は、これを「九月尽の夜があけることをいう」(『和泉』)のように夜が明けると解釈している。当時の日付変更時点は丑の刻と寅の刻との間の一点であった。現在の午前三時であるから外界は真っ暗である。その時点で、日

付が変わり、秋は終わっているのである。折から秋深く、午前三時から夜明けまでは相当な時間があるはずである。その時間を無視して、なぜ夜明けの時点を持たなければならぬのであろう。

さて、九月尽、つまり秋の終わりは午前三時であると述べたが、そのことは、二つ後ろの386番歌でも次のように詠って認めている。

百首歌たてまつりける時、九月尽の心をよ

花園左大臣家小大進

386 今夜まで秋はかぎれとさだめける神代もさらにうらめしきかな

秋は「今夜まで」であると「神代」の昔に決められたことを恨む歌である。もちろん、「今夜(こよひ)」は九月尽日の夜のことである。さらに、コヨヒはもちろん今晩の意味であるが、平安時代においては、コヨヒの終了時点は午前三時であったことは、先に述べた。とすれば、この歌は九月尽の終了は午前三時であると述べている歌になるのであった。

同じ歌集の中でさえ九月尽の終わりが、午前三時と述べているのだから、先に問題とした384番歌の動詞アクも「日付が変わる」意味で使用されているはずである。

さて、以上のことは言わずもがなのことかもしれない。九月尽は九月尽日のことであるのは明白だが、「尽日」とそれが日付に関わる概念であるのなら、当然、日付の終了時点でその「尽日」も終わるはずだからである。

二一三

七夕の心をよめる

源俊頼朝臣

239 たなばたのあまのかはらのいはまくらかはしもはずあけぬこの夜は

こひの歌とてよめる

寂蓮法師

765 おもひねのゆめだに見えであけぬればあはでもとりのねこそつらけれ

これら二首は恋の歌である。239番歌の口語訳を見てみる。「織女が天の川原での逢う瀬で共寝をしたかしないかに、早くもこの夜は明けてしまったよ。名残惜しくも」(『和泉』)が一つの解釈で、『新大系』も大差はない。ここでは一つ別の角度からこの歌をみてみよう。この歌は「七夕」の歌である。七夕は、織り姫と彦星が七月七日の夜に天の川で出会うという伝説がその祭りの根拠である。ところが、現

代の七夕を考えてみよう。現代の日付変更時点は夜中の十二時である。とすると、現代の七夕は七月七日から八日に掛けて出会っていることになり、必ずしも「七月七日」の伝説と結びつかないのである。ところが、平安時代の日付変更時点は午前三時だったから、また、次節で詳しく述べるが、午前三時以降はアカツキと呼ばれる時間帯であった。そのアカツキが男女の別れの時間帯であった。当時の男女は午前三時を過ぎると別れるのだから、織り姫と彦星は七月七日の夜に出会って、八日になると分かれていたのである。そこで「あけぬこの夜は」と言っているのだからこの動詞アクが今日の夜明けを意味しているとは考えられないのである。またここで使用されている単語は、「この夜」だが、ほぼ同意のコヨヒ（今夜）は、それが昨晩の意味で使用された場合でも、今晩の意味で使用された場合でも、その終了時点は午前三時（日付変更時点）だったのである。「あけぬこの夜は」もコヨヒがアクと同意と類推してよいのであろう。

765番歌は「こひの歌とよめる」と詞書にあるのだから、恋の歌であることに問題はなからう。一応注釈書の口語訳を試みる。「あなたのことを思いながら寝た夜の夢にさえお逢いできず夜が明けてしまったので、逢う瀬の後朝の別れではないが、鶏の鳴声が恨めしく聞こえるよ」（『和泉』）とここでも動詞アクを夜明けと捉えている。しかし、765番歌は、恋の歌であったはずだ。とすれば、アカツキに男は女の家を離れなければならなかったのだから、この動詞アクはやはり「日付が変わる」意味ではなかったのか。ここで、「とりのねこそつられ」と鶏が鳴いているが、「あけぬれば」を夜が明けているならと解釈するなら、鶏の鳴く音に別れを促されるまでもなく、別れの時間には既になっているのではないか。『和泉』には、『治承三十六人歌合』第三句が「明行けば」とあることが指摘されている。アカツキの鐘を「明け行く鐘」ともいうが、アカツキの時間が過ぎていくことをアケユク（明行）という動詞は意味する。第三句の「あけぬれば」を日付も変わると取り、結果、第三句が「あけぬれば」であっても、「明行けば」であっても、765番歌の意味は変わらないことになるのである。

二一四

仁和寺の御子のもとにて、郭公の歌五首よみ侍け
る時よめる

按察使公通

148 郭公まつはひさしき夏の夜をぬぬにあけぬとたれかいひけむ

山家雪朝といへる心をよみ侍ける

大納言経信

445 あさとあけて見るぞさびしきかた岡のならのひろはにふれるしらゆき

148番歌は『和漢朗詠集』の「夏の夜を寝ぬに明けぬといひおきし人は物をや思はざりけん」を本歌として、この本歌は、「人は物をや思はざりけん」とあるのだから、恋の歌であろう。とするなら、この動詞アクも「日付が変わる」意味で使用されていることになる。

445番歌も、『万葉集』の「夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭もはだらにみ雪降りたり」（巻十・二二一八）を本歌として、この本歌は、「夜を寒み」と歌っているから、この時点が夜であることがわかる。とすると、「朝戸を開き」は「朝になって」と言う意味と「戸を開く」意味との掛詞であることが分かる。万葉時代では午前三時以降がアカトキ（平安以降のアカツキ）であり、アシタ（朝）でもあった。従って、朝の戸を開けば、アシタ（翌日）になっていたのである。445番歌が『万葉集』歌を本歌としている以上動詞のアクは「日付変わる」意味で使用されていると考えて問題なからう。

実は、この『千載和歌集』のアシタの用例で一つ疑問に思っている用例があるので、それを紹介する。

藤原実方朝臣のとのみどころにもるともにふして、

あか月返てあしたにつかはしける

藤原道信朝臣

963 いもとねておきゆくあさの道よりも中くものはおもはしきかな

この歌のどこに問題点があるかという点、「あか月返てあしたにつかはしける」の部分である。445番歌の説明の中で、「万葉時代では午前三時以降がアカトキ（平安以降のアカツキ）であり、アシタ（朝）でもあった。」と述べた。この963番歌でも、詞書に、「あか月返て」とあり、それを和歌で、「いもとねておきゆくあさの道よりも」と詠んでいる。アカツキがアサであることを言っている。アシタとアサは同じ形態素の露出形と被覆形との関係であろうから、「あさの道」と詠むことによって、アカツキがアシタであることを和歌が述べていることになる。ところが、詞書を見直してみると、「あか月返て」の後に「あしたにつかはしける」とあるのである。詞書ではアカツキとアシタが別の時間帯であると述べていることになる。

しかし、この問題は既に結論が出ているのかもしれない。それは、『和泉』の頭に注に、『道信朝臣集』（書陵部蔵・甲本）の詞書では、「実方のきみのとのみどころ

にもろともふしてあかつきにかへりてつとめてふみして」とあることが紹介されているからである。右の詞書ならアカツキのあとにツトメテがきて、アカツキと「アサの道」、つまり、アシタが同時になるからである。この問題については、後に別稿で詳しく論じるつもりであるが、とりあえずは、アカツキの後にツトメテが来、それらはまとめて、アシタに含まれると理解して良いと考える。

二一五

人のわざしける導師にて諷誦文をよみけるに、歌の

侍ければよみ侍ける

慶範法師

577 うちならずかねのおとにやながき夜もあけぬなりとはおもひしるらん

法華経の我等長夜修習空法の心をよめる

前中納言師仲

1230 ながき夜もむなしきものとしりぬればはやくあけぬる心ちこそすれ

これらの和歌中の動詞アクは、「ながき夜」が「あく」の形で使用されている。この「ながき夜」は宗教上の長夜の闇のことを意味しており、直接的に実際の生活と時空を同じくするものではない。しかし、「ながき夜」が「あけ」と三会の暁が到来するという考えがその背後にあると考えられる。実際の生活時間としてのアカツキと宗教概念の三会の暁は全く関係しない概念のはずだが、そこには通底するものがあるように当時の人はとらえていたのではなからうか。

以上、『千載和歌集』での動詞アクの用例11例のうち8例について述べてきた。それらの動詞アクは、「日付を変える」意味で使用されていると考えてよかったことになる。残り三例のうち一例は¹¹⁸³番の「ともしてはこねの山にあげにけりふたよりみよりあふとせしまに」である。この歌は誹諧歌に分類されており、おかしみが本歌の中心目的であろうが、この歌の背後に戯れの恋を読み取れば、ここでの動詞アクも「日付が変わる」意味になる。さて最後に残りの二つの動詞アクの用例を見てみる。一つは、⁴²⁸番歌中の「ほのほのとあく」であり、これは副詞に連続するアクであり、明るくなる意味と考えられる。いま一つは³⁰⁰番歌中の「秋の夜の月をのこしてあくるしののめ」である。「秋の夜の月」などからはこれも「日付が変わる」意味の動詞アクではないかとも思われるが、これも明るくなる意味のアクと捉えておくこととする。

ここまで『千載和歌集』中の動詞アクを検討してきたが、平安文学を理解する場

合に動詞アクは「日付が変わる」意味と捉えるべきだという私見は確認されたことになり、各歌の解釈も多少の変更が必要となる。

三一

本節以下では、『千載和歌集』のアカツキについて述べる。まず、『新大系』『和泉』両注のアカツキ、およびアカツキノカネなどアカツキを含む語の注釈の実際を述べる。

アカツキについては、「夜半から夜明け近くのまだ暗いころまで。」(『新大系』「夜明け前のまだ暗いころ」(『和泉』³⁹⁷番注)とある。また、アカツキの鐘には、¹¹⁴⁹番歌の注で、「寺で撞く晨朝(じんちよう)の鐘。」(『新大系』、「晨朝の鐘。」(『和泉』)とそれぞれ注釈されているように、ともに、晨朝の鐘と考えていたようだ。しかし、このことについては既に述べたことだが、アカツキは午前三時(日付変更時点)以降を言い、アカツキの鐘はアカツキの到来の時点で鳴る鐘だから、夜の鐘であった。

アカツキの時間を理解するのにもしろい例が『千載和歌集』に存在するので、その例から検討しよう。

夏夜暁月といへる心をよめる

藤原経家朝臣

215 我ながらほどなき夜はやをしからむ猶山のはに有明の月

月は自分ながら時間の短い夏の夜が惜しいのだろうか。まだ山の端に残っているよ、片割の有明月の姿で。(『新大系』)

月自身程なく明ける短い夏の夜が名残惜しいのであろうか。この暁がた、まだ山の端に有明の月が半分割れながらかかっていることだよ。(『和泉』)

右に見るように二つの注釈には大きな差異はない。ここでは、「片割」(『新大系』、「半分割ながら」(『和泉』)と半月が詠まれている。朝方に大空に存在する半月は、二十二、三日頃の月である。しかもこの月が、「山のは」に存在するというのである。大まかに言って、二十二、三日頃の月は朝方六時頃にはほぼ南中しており、とても山の端にあるとは言えない。それでは、山の端にあると言うためには時間をどれほど遡らせればよいか。それが三時間ほど午前三時となるのである。なぜか、後夜や晨朝は仏教における六時の一である。なお原則二十四時間を六等分したものが

六時であった。従って、六時は四時間の時間と対応することになる。さらに、中夜が子、丑の刻と対応し、あと四時間ずつ変化していくのである。とすると、午前三時の後夜の鐘の後、晨朝の時刻は午前七時から午前十一時を指すことになる。そして、晨朝の時刻の到来を告げて鳴らされるから、午前七時に鳴らされることになる。この時間では、二十二、三日頃の月は南中を通り越して、やや西に傾いてしまい、山の端に存在しなくなってしまう。とすれば、晨朝の鐘でないことは明白だ。また、後夜より前は中夜であり、午後十一時から翌日の午前三時をさすが、中夜の鐘が鳴らされるのは午後十一時であり、これでは、山の端どころか、地上に現れていないことになるのである。

またここでは、もう一つ重要な単語が登場する。アリアケ(ノツキ)である。かつて、アカツキという詞書がある平安時代の和歌はその時刻を表現するために、和歌中にアリアケを持つことが多いことを根拠として、アカツキの時間に出ている月がアリアケ(ノツキ)であることを指摘した。まさにこの歌は、詞書に「暁」が存在し、歌中に「有明の月」が存在する歌でもあったのである。

ここで、私見をもう一度まとめると、午前三時以降がアカツキであり、アカツキの鐘は、アカツキの到来を告げて、午前三時に鳴らされる鐘であり、アカツキ(午前三時以降)に出ている月がアリアケ(ノツキ)であった。また、もう一つ私見を加えると、アカツキガタはアカツキという時間帯の始まり部分を指す。従って、午前三時過ぎとでも現代語に訳せばよい単語だったのである。

215番歌に戻ろう。実は、口語訳に何も加えるものはない。ただし、他歌ではあるが、アカツキやアリアケノツキの解釈をこの歌に適用するとそこには矛盾が生じることになる。『和泉』が引用する服部高保の『千載集歌評』では、そのあたりを「われながらてふ語はこちたき也。次に猶山のはに有明の月てふ二句猶しも心得はべらず。有明の月は凡みそらに有て夜は明る故にしかいへり。山のはにといひては有明にもあらず様に聞ゆ。夜の明果なば山に月は入ぬべき様なり。そはたゞの夜の月也。又月の出し山の端になしてはあまり月おそく出たり。是らいづれにも論なり。なべに哥の様よろしくも聞えはべらず」と述べているが、アカツキやアリアケの理解ができていなかった様子が見て取れる。「又月の出し山の端になしてはあまり月おそく出たり。」と述べることには、今一つの単語の理解が出来ていなかったのではと推測される。それは「夜は」という語である。ヨハ(夜半)は午後十一時から午前三時までの時間帯を指し示す単語だった。当然午前三時になりアカツキの時間帯なのだから、「あまり月おそく出たり」という疑問は論外だが、半月がやっとと

空に現れ、山の端にある理由をこの歌は、「夜はやをしからむ」と詠むのである。ヨハは普通には女性のもとにいる時間帯である。その時間帯が懐かしいのか、隠れていた山の陰からなかなか離れられないのは、私と同じかも(「我ながら」とふざけているのであろう。

いづれにしても、アカツキなどを私見に沿って理解すれば、215番歌はその詞書も含めて矛盾なく解釈できるのであった。

三一二

『千載和歌集』中には、詞書と歌の中にアカツキが21例存在するのでその全てを検討することは出来ないが、前段の215番歌とともに是非検討しておきたい歌に、319番歌がある。和歌と解釈を引用する。

法印慈円

319 山ざとのあか月がたのしかのねは夜半のあはれのかぎりなりけり

山家住まいの暁に聞く鹿の声は、夜中つらく感じ続けた哀れさの極限であったよ。(『新大系』)

山里の暁方に聞く鹿の鳴声は、秋の夜の哀れを催す究極のしあげだなあ。(『和泉』)

さて、この歌を解釈するとき重要なことは、ヨハ(夜半)とアカツキガタ(夕方)の時間関係である。先にも述べたように、ヨハは午後十一時から午前三時であり、アカツキガタは午前三時過ぎであった。妻を求めて夜鳴く鹿の声が哀れなことはよく知られている。それもヨハに鳴いているのである。鹿の話ではなく人間に話を移せば、「宵暁の出入り」という言葉があるように、普通、男性が女性の所に出かけるのはヨヒ(宵)であり、女性の所から帰るのはアカツキ(暁)であった。それをこの歌に適用してみよう。アカツキガタに鳴く鹿は一晩中(ヨハ)妻を求めて鳴いていたのであろう。そして、アカツキガタがやってくる。この時間は男性が女性のもとから帰る時間帯である。とすると、アカツキガタに鳴く鹿は一晩中妻を求めていたが、捜し出すことが出来ずにそのことを確認するかのようになっていることになる。それこそが、「暁に聞く鹿の声は、夜中つらく感じ続けた哀れさの極限であったよ」(『新大系』)であり、この歌の背後に人間くささを感じるからこそこの歌は興味深いのであった。

三一一

後の節でアリアケ歌を検討するが、そのアリアケという語を理解するのに役立つ歌を検討する。

高野にまゐりてよみ侍ける

寂蓮法師

1236 あか月をたかのの山にまつほどやこけのしたにもありあけの月

真言宗では空海は死んだのではなく、高野山の石室に入定（意識を集中させ心が乱されないような状態に入ること）留身していると信じられている。迦葉の弥勒出世を待っての鶏足山入定留身の故事（付法藏因縁伝）に拠るか。

〔新大系〕

私が高野山で暁を待っている間、わたしだけでなく入定された弘法大師が苔の下にいらっしやうってやはり竜華の暁を待って居られるのだったよ。〔和泉〕

高野山でアカツキを待つ寂蓮が詠んだ歌である。この歌でおもしろい点は、歌を詠んだ時点では、大空に月はでていないことである。もちろん、「こけのしたにもありあけの月」と弘法大師をアリアケノツキに例えているが、その弘法大師は「苔の下にいらっしやうってやはり竜華の暁を待って居られる」のように苔の下に居られて姿は見せていないのである。それではなぜ、見えてもない月をアリアケノツキと呼べるのであろうか。寂蓮は時間帯の呼称であるアカツキを待っており、苔の下の弘法大師は竜華三会の暁を待っておりで、先にのべたように、「竜華三会の暁」は仏教概念であって、時間帯のアカツキとは直接関係しないが、これら二つの概念はアカツキつながりで、ある面同質のものと考えられていたようなのである。アカツキという時間帯に出ている月がアリアケノツキであった。とすれば、アカツキを待つ自分の目に月が飛び込んでくれば、その月はアリアケノツキであるのと同様に、竜華三会の暁を待つ弘法大師がその暁に出現し、その身を月に例えるならば、アリアケノツキになるのであった。この歌は、仏教概念の竜華三会の暁と時間帯のアカツキの同質性とアリアケノツキはアカツキに出ている月であるという私見を証明している歌なのであった。

三二四

遠所へまかりける人のまうできてあか月かへりけ

るに、九月尽日むしのねもあはれなりければよみ侍る

紫式部

478 なきよわるまがきのむしもとめがたきあきのわかれやかなしかるらん

鳴声が次第に弱々しくなっていく垣根の虫も、とどめることの難しい秋との別れが悲しいのであろうか。私だけでなくてね〔和泉〕

の歌を検討する。この歌の『紫式部集』の詞書は「その人、とをきところへいくなりけり、あきのはつる日きたるあかつき、むしのこゑあはれなり」であること、『和泉』に指摘されている。『千載和歌集』の詞書と『紫式部集』の詞書を合わせて考えると、この「遠所へまかりける人」は九月の尽日にやってきて、翌日の早朝に帰って行ったと予想される。別れの挨拶にでもやってきたのであろうか。その折節、垣根で虫が鳴いていたというのである。『新大系』では、「あきのわかれ」に「秋との別れに、友との別れを響かせる。」と注をつけている。その通りであろう。ただ、蛇足を加えるなら、九月尽日を過ぎて、友達が式部のもとを去っていかないと、「秋との別れ」にはならないことである。『千載和歌集』の詞書は、「遠所へまかりける人のまうできてあか月かへりける」と無造作に詞書を書いているが、詳しくは、「九月の尽日に」遠所へまかりける人のまうできて（その翌朝の）あか月かへりけるに」とありたいところなのであった。

アカツキという語がその開始時点で日付変更時点と結びついていないと右の歌は解釈が成り立たないのである。

今一つ、

いぶかしくおぼしめされける人のむすめの、女房

のつぼねにゆかりありてしのびてかたがへにま

るれりけるを、あか月とくいでにければ遣しける 選子内親王

968 あひみむとおもひし事をたがふればつらきかたにもさだめつるかな

この歌は詞書によれば、選子内親王が会いたいと思っていた女性が、内親王の御所住みの女房のもとに方違えにやってきていたのだが、アカツキに帰ってしまい逢うことが出来なかった事情を詠んだ歌ということになる。この場面で、アカツキが使用されているが、アカツキの持つ二つの側面が指摘されて良いかもしれない。一つは、前歌と同様に日付変更時点がアカツキの前に存在すること。いま一つはアカツキが広く一般の人が行動するには早すぎる時間帯であることである。「選子内親

王が会いたいと思っていた女性」はこの御所に方違えにやって来ていたのだ。方違えは多くの場合日付と関係する。つまり、アカツキになれば、日付が変わっており、方違えを終了してもよかったと想定される。しかし、アカツキの時間は、朝早い時間帯だから帰宅するには不自然な時間帯であったという前提を、このアカツキという語は詞書の中で述べていることになる。アカツキという語は早朝早い時間の認識は一般にもたれているが、現在のところ、日付変更時点がその開始時点であるという認識はまだそれほど強くない。本節で取り上げた478番歌同様、この968番歌の解釈のためにはアカツキの始まりが日付変更時点であることの認識が重要となるのである。

三一五

アカツキという語のもう一つの側面は、アカツキとアケガタは同時性があるということである。

関路暁月といへる心をよめる

法眼兼覚

534 いつもかくありあけの月のあけがたはものやかなしきすまのせきもり

の歌の詞書の傍線部と歌中の傍線部を見合わせれば直ぐに了解されよう。もちろん、アケガタはアカツキであるからそこに出ている月はアリアケであることになる。ここでは、アカツキに関連してアケガタを使用した歌一首を見ておく。

惟宗広言

323 さびしさをなににたとへんをしかなくみ山のさとのあけがたのそら

さびしさは何にたとえよう。牡鹿の鳴くこの深山の里の明け方の空の情景よ。
〔『新大系』〕

この寂しさを何にたとえようか。雄鹿が妻を求めて悲しげに鳴く声が奥山から聞こえる、そのふもとの里の夜明け方の空の眺めよ。〔『和泉』〕

この歌は「しかのうたとてよめる」の詞書にまとめられる九連作の一である。なお、この九連作には、三二二節で検討した、法印慈円の「319山ざとのあか月がたのしかのねは夜半のあはれのかぎりなりけり」も含まれる。その319番歌と本歌の関係を『和泉』は「三一九歌と同様、暁方の鹿鳴に悲哀を感じる歌を配列。」と述べ、

319番歌と同趣向、少なくとも同時間の歌だと述べている。『和泉』は『惟宗広言集』の当歌が「山家暁鹿」の詞書を伴って掲載されていると述べるが、そのことは、アカツキとアケガタが534番歌とその詞書で確認したように同時性があることを述べることになる。ここで、確認しておくが、アカツキとアケガタは同時性があるとしても、その関係は全く過不足なく同時なのであろうか。アカツキがアカトキに語源を持ちある程度の時間帯を意味するのには、アケガタはカタという語構成要素を持っており、このカタは名詞に付く場合（アカツキガタ、アサガタ、ユフガタなど）でも、動詞の連用形に付く場合（チリ〈散〉ガタ、クレ〈暮〉ガタなど）でもその開始時点を指す場合が多い。とすれば、アケガタとアカツキガタは同じアカツキの時間帯の開始時点辺りを指していることになる。まさに、『和泉』の「三一九歌と同様、暁方の鹿鳴に悲哀を感じる歌を配列。」は正鵠を射ていたことになる。319番歌の検討で述べたように、当歌でも鹿の悲哀の背後に人間生活（恋）の悲哀を感じるべきだったのである。少なくとも、アケガタをそのまま「明け方」〔『新大系』〕と口語訳したり、まして、「夜明け方」〔『和泉』〕と口語訳することは許されないのである。ただ、実際には真っ暗な夜であるのに日付は変わっている時点を表す単語は当然ながら現代社会ではないことは、両訳の弁解として付け加えておかなければならぬだろう。

ともかく、当323番歌はまだ真っ暗な時点で、319番歌と同趣向を詠んでいることになるのである。

なお、アリアケガタ（有明方）という語が存在し、当『千載和歌集』でも、1014番歌と1152番歌に使用されている。1014番の詞書は、「山家暁霰といへる心をよめる」である。アリアケ（ノツキ）がアカツキと関連が深いことは本稿でも既に述べてきたところだが、アリアケを語構成要素に持つアリアケガタもアカツキと関係が深いことがわかる。さらに、本節で述べてきたアカツキガタとアケガタの時間的側面を考えるとこのアリアケガタもそれらと時間的には同じ面を持つと考えられる。ここでは、1152番歌を検討する。

秋のころ山寺にてよみ侍ける

藤原良清

1152 おもふ事ありあけがたのしかのねになほ山ふかくいへるせよとや

さまざま思うことのある夜明け方に聞く鹿の鳴き声は、物悲しさ限りなく厭離の思いもいやますが、いっそう山深く俗世を離れて住めと勧めてなくのであらうか。〔『和泉』〕

右に口語訳を載せたが、ここでも「夜明け方」は無理であること、既述の通りである。先の323番歌、319番歌に通底する人事の感覚（恋）がこの歌にもあるのだが、ここではもちろん、上記二首ほどその趣は強くなく、「恋に鳴く鹿の声など聞いては、まだこの夜の迷夢を断ち切れないだろうから」鹿の声もない山奥に居を移さなくてはといったところであろうか。

四

次に、アカツキと強い関連性を持つアリアケの歌を数首検討して本稿を閉じることにする。ここで、第一節で述べたことが関係する。アリアケはアカツキという時間帯を表現するのに使用されるといふ事実である。作品で、アリアケが使用されれば、それはそのままアカツキという時間帯を表現しているのであった。第一節でも述べたが、『千載和歌集』の詞書に10例アカツキが使用されているが、そのうち7例が和歌ではアリアケと表現している事実である。アリアケという語は午前三時過ぎのアカツキのイメージと全く重なっているのである。実は、このアリアケが使用されない3例は全て、今までの論述で用例として使用されているのであって、先に例外を述べることで、アカツキとアリアケの結びつきの強さを確認する前段階にしたい。

遠所へまかりける人のまうできてあか月かへりけるに、九月尽日むしのねもあはれなりければよみ侍る

紫式部

478 なきよわるまがきのむしもとめがたきあきのわかれやかなしかるらん

藤原実方朝臣のとのゐどころにもろともによして、

あか月返てあしたにつかはしける 藤原道信朝臣

963 いもとねておきゆくあさの道よりも中々ものはおもはしきかな

いぶかしくおぼしめされける人のむすめの、女房

のつばねにゆかりありてしのびてかたがへに

まるれりけるを、あか月とくいでにければ遣しけ

る 選子内親王

968 あひみむとおもひし事をたがふればつらきかたにもさだめつるかな

以上がその3首である。これらうち478番歌と968番歌は別れの時間がアカツキであっ

ただで、直接その時間を詠んでいない。ただ、963番歌は、アカツキを「あさの道」で表現しており、アカツキにアリアケを対応させない本当の例外はこの歌のみであると言える。アカツキとアリアケの結びつきが強いことが分かるし、『千載和歌集』で特にその傾向が強いことが分かる。

人に饒し侍けるあか月よみ侍ける

右衛門頼実

496 わするなよをばすて山の月みてもみやこをいづるありあけのそら

この歌の解釈は問題がないので、両注の口語訳を上げない。ここで問題となるのは、『新大系』の「別れた早暁、西空にかかる有明の月を眺めて、旅立つ人が行く信濃国の姥捨山の月を想い、送別の一首を成した。」の文である。この文と状況がよく似た歌が『新古今和歌集』にある。963「もろともに出でし空こそ忘れぬ都の山の有明の月」がそれで、月の出と作者の都からの出発を「もろともに出でし空」に表現されているのである。もちろん、このアリアケノツキは東の空にあるはずである。本来、アリアケノツキは空の東にあるか西にあるかは問題とはならない。ところが、平安時代も古いとなぜか西の空にあるイメージ強く、平安時代も下この『新古今和歌集』の歌のように東にあるイメージが強い。では、その両者の月のイメージはどのようにちがうのであろうか。西の空にあれば、そのアリアケは満月に近く、東にあれば三日月に近いのである。もちろん、光量も違うから、その月を見るもののイメージは大きく違うはずである。アリアケは東にあっても、西にあっても哀れさを感じる物のようにあるが。東にあれば、その月は夜空に細く微かに輝くことになる。その方がより『千載・新古今』時代の文学イメージと一致するのではないか。

ここでの496番歌も東の空にあった可能性が高いのではなからうか。

最後に、私自身解釈に確信を持たずにいるアリアケ歌を検討して、本稿を閉じることにする。

題不知

藤原範永朝臣

498 ありあけの月もし水にやどりけりこよひはこえしあふさかのせき

有明の月も関の清水に宿ったことだよ、私も今夜はここに旅寝して逢坂の関は越えまい。『新大系』

有明の月も関の清水に映じて宿っていることよ。夜が明けるまでこうしてい

るはずだが、では私も今晚は逢坂の関を越えることなく、ここで一夜を過ごすことにしよう。(『和泉』)

問題点は、「こよひ」に月は宿っているという事実である。アリアケは午前三時以降の月である。他方、「こよひ」は午前三時までを言うのである。とすると、和歌の解釈としては少し理屈っぽい、「明日(午前三時過ぎ)になれば、アリアケになる月が今は目の前の泉に映っているのだから。「こよひ」のうちはここで休んでいこう。」となるのであった。これは、私訳だけの問題ではないが、「アリアケになる月が今は目の前の泉に映っている」とどうして、「こよひ」のうちはここで休むことになるかの関係が分からないのであった。あえて、提案するならば、このアリアケになる月が今は休んでいるけれど、明日になれば、アカツキの空にアリアケの月となって、人の旅立ちを送る時間、条件が整うから。となろうか。いささかの疑問を感じながら、提案しておく。

五

本稿の目的は、『千載和歌集』で使用されているアカツキ、アリアケなどを私見に基づいて解釈すると、どのように解釈できるかを検討してみるものだった。その意味では、『千載和歌集』の選釈でも命名すべきであった。しかし、本稿は、こうした解釈を重ねていく中で、アカツキなどに対する私見の正しさを証明する側面も持っていた。概ね、私見の立場に立っても、解釈が出来る、いや、より合理的にできることは述べえたと思う。さらに、同じアリアケでも、そのアリアケは時代によって、明暗の変化があったのではという問題点などの指摘できたと考える。

注

- (1) 細田恵子「八代集ありあけのイメージ」(一九七四年『文学史研究』(大阪市立大学)『15号])
- (2) 拙稿「アカツキとヨハ」(拙著『アカツキの研究』(二〇〇二年 和泉書院刊)所収)
- (3) 拙稿「アケ考」(拙著『アカツキの研究』(二〇〇二年 和泉書院刊)所収)
- (4) 拙稿「コヨヒ考」(拙著『アカツキの研究』(二〇〇二年 和泉書院刊)所収)
- (5) 『満濟准后日記』の「アカツキ」を予定している。

(6) 拙稿「日付変更時点とアカツキ」(拙著『アカツキの研究』(二〇〇二年 和泉書院刊)所収)

(7) 拙稿「アリアケとアケグレ」(拙著『アカツキの研究』(二〇〇二年 和泉書院刊)所収)

(8) 注(2)に同じ。